広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

空の輝きを閉じ込めた大阪切子

安田公子　大阪／大阪切子職人

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT　　」（主催：LEXUS）は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやwebメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。

2年目となった今年は、全国47都道府県から計51名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ね、途中経過のプロダクトをうけて行うエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの試作に取り組んだ。

1月17日に都内で行われた商談会では、百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて半年間をかけて製作した自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。また、商談会の終盤ではビームスジャパンとのコラボレーション企画「LIFE with NEW TAKUMI ～新しい匠、新しい暮らし～」が発表されるなど、プロジェクトも進化している。

1月17日、プレゼンテーションにて

バイヤーたちにプロダクトを紹介

安田さんの展示ブース

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。

大阪府選出の匠、大阪切子職人の安田公子さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

自作とともに

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

誰も見たことのない切子をつくりたい

「十数年前に切子を始めた頃の私が、今日の自分の姿を見たら驚くでしょうね」。プレゼンテーションを終え、安田さんは半分夢のなかにいるような表情で笑った。仕事の傍ら楽しむ趣味のつもりで始めたことが、一生をかける仕事になり、今年はLEXUS NEW TAKUMI PROJECTの大阪府代表に選ばれた。人生の意外な変転に、あらためて感慨深いものがあったのだろう。

友人に紹介され、軽い気持ちで通い始めた切子教室。しかし初めて機械の前に座った瞬間から、これは一生続けることになりそうだという予感がした。そう彼女はいう。まさに運命的な出会いだった。知れば知るほど奥が深い、大阪切子の繊細で高い技術。その伝統の技を余すことなく習得し、後の世代に伝えていきたい。生徒ではなく、弟子として師匠の下で働こう。そう決心するまでに時間はかからなかった。

昨年6月、キックオフ・セッションに臨んだ彼女に、サポートメンバーの清川あさみ氏が問いかけた。「たとえば、いろんな色に輝く宝石のような切子ってできないですか？」。その言葉が安田さんの胸に響いた。宝石。切子職人の自分が何をつくればそれは宝石といえるだろう。人を感動させることができるだろう。彼女が考えたのは、宝石には「原石」が必要だということ。これまで見たことのない3色の生地（カット前のグラスなど）を使うというアイデアが生まれた。

完成したプロダクト「一天」は、藍からピンク、金に近い黄色へという3層グラデーションの宙吹きガラスに、細かいカットを施したやや大きめサイズのタンブラー。それぞれの色が溶け合い、反射し合ってえも言われぬ輝きを生み出す。「自分なりの宝物ができたなと思います」。安田さんは控えめに胸を張った。

三つの色が溶け合う

完成プロダクト　切子グラス「一天」

手の中で光を放つ一瞬のために

日の出と日没の直前、世界のすべてが幻想的な薄明かりに包まれる特別な時間。写真や映像の世界ではそれを「マジックアワー」と呼ぶ。「一天」がモチーフとしているのは、そんな一瞬の輝きだ。

彼女に重要な示唆を与えたのは、工房を訪れたサポートメンバーの下川氏。具体的な風景、たとえば空のイメージはどうか。そう提案したのは下川氏だ。「濃淡のグラデーション表現には以前から取り組んでいたんですが、空という言葉を聞いた瞬間に、そうか空だ、私がグラデーションで表現したいと思っていた美しさは空にある、と気付いたんです」

中に水を入れた時、上からのぞき込んだ時、「一天」はそれぞれ違った色合いを見せる。プレゼンテーションの日、彼女のブースでは、まるで騙し絵を楽しむかのように角度を変え、後ろに回り込んで表情の変化を楽しむ人たちの姿が見られた。

安田さんは、磨きをかけたガラスが手の中で輝き始める、その瞬間が好きだ。切子の仕上げには「酸磨き」と「手磨き」という二つの技法があるが、彼女は常に手磨きを選ぶ。「カットした面はそのままでは不透明で、完成品の本当の姿は最後の最後までわかりません。自分が磨きをかけてキラキラと輝く切子を見るのは、今でもすごく楽しいと感じます」。自分の手から作品が生まれる喜びを、一つひとつ新鮮に感じられる。本人は知らなかっただろうが、この人の中にはずっと「職人気質」が眠っていたのだろう。

ここ数年は、大阪切子がメディアに取り上げられることも増え、その認知は徐々に広がってきたと感じる。伝統を受け継ぎながらすぐれた技術の魅力を伝え、後継者の育成につなげることがこれからの目標だ。大阪切子の技で空を映し出した「一天」のきらめきは、胸の奥に情熱を眠らせた未来の職人にも、きっと届くに違いない。

エリア・コンサルティングにて

安田さんの作業風景

安田 公子
大阪／大阪切子職人

関西大学卒業後、2006年切子ガラス工芸研究所たくみ工房入社。17年、自身の切子工房を設立。個展「安田公子切子展」開催。現在は大阪市立クラフトパーク講師、たくみ工房講師を務める。第17回新美工芸会展大阪市市長賞、第43回日本伝統工芸近畿展大阪府教育委員会賞などを受賞。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT